

主 題：罪と向き合う 1

聖書箇所：ローマ人への手紙 6章1－14節

「ローマ人への手紙」6章を開いてください。6章はパウロの質問によって始まっています。1節で「それでは、どういうことになりますか。恵みが増し加わるために、私たちは罪の中にとどまるべきでしょうか。」と語っています。そして、2節からその質問に対するパウロ自身の答えが記されています。注意して見てください。同じローマ6：15には「それではどうなのでしょう。私たちは、律法の下ではなく、恵みの下にあるのだから罪を犯そう、ということになるのでしょうか。絶対にそんなことはありません。」と、同じような質問がされています。そして、15節の後半のところは1節で見たように、同じようにパウロはその質問に対する答えを与えています。ですから、この6章にはパウロは二つの質問を挙げているのです。ローマ7：7に三つ目の質問があります。「律法は罪なのかどうか」という質問をして、その質問に彼自身が答えています。

☆パウロのメッセージに反対する人たちに対して

1. パウロの質問と反論

1) パウロの質問

この6章から8章を見た時に出て来るこのような質問は、パウロが思いつきで何となく挙げた質問ではありません。また、非現実的な架空の質問でもないのです。パウロがこのような質問をしたことには根拠があるのです。というのは、パウロが語ってきた「恵みによる救い」、「無代価の義認」、罪が赦されるためには代価、行ないは必要ではないというメッセージに反対する人々が存在していたからです。皆さんもよくご存じのように、また、私たちが学んで来たように、パウロはこれまで「恵みによる救い」のメッセージを語って来ました。そして、多くの人々がそのメッセージに反対し、ときには、迫害にまで至りました。このことはパウロ自身が実際の宣教を通して経験したことだったのです。例えば、パウロたちがアンテオケにいたときのことです。「使徒の働き」15章に記されていますが、アンテオケで起こったことが後にエルサレムへと発展して行きます。使徒の働き15：1－9に「さて、ある人々がユダヤから下って来て、兄弟たちに、「モーセの慣習に従って割礼を受けなければ、あなたがたは救われぬ。」と教えていた。」、このような行ないによる救いというものを教えているユダヤ教徒たちがいたわけです。「2 そしてパウロやバルナバと彼らとの間に激しい対立と論争が生じたので、パウロとバルナバと、その仲間うちの幾人かが、この問題について使徒たちや長老たちと話し合うために、エルサレムに上ることになった。… 5 しかし、パリサイ派の者で信者になった人々が立ち上がり、「異邦人にも割礼を受けさせ、また、モーセの律法を守ることを命じるべきである。」とあった。」とあります。これはエルサレムでのことです。アンテオケでパウロたちの語っているメッセージにユダヤ教徒たちが反対しました。恵みによって救われることなどあり得ない、律法を守ることによって、行ないによって救われるのだと言ったのです。そこで彼らはエルサレムへと移動しました。最初に行なわれたエルサレムでの会議です。そこで5節に見るとおり、もともとパリサイ派に属していたが、確かにイエス・キリストを信じて救われた人々、実は、彼らも非常に混乱をしています。彼らは行ないによる救いとは言っていません。しかし、異邦人にも同じように割礼を受けさせて、モーセの律法を守ることを命じなければいけないと、救われた者たちまでもがこのように言っていたのです。

少し後の使徒の働き21章を見てください。ここにはこのようなことが記されています。パウロがエルサレムの長老たちとの交わりをもった、そのときのことです。21：20「彼らはそれを聞いて神をほめたたえ、…」つまり、パウロが神が為さった様々なみわざを証し、それを聞いていた人々は非常に喜んで神をほめたたえ、「パウロにこう言った。「兄弟よ。ご承知のように、ユダヤ人の中で信仰にはいつている者は幾万となくありますが、みな律法に熱心な人たちです。」、ユダヤ教徒たちの中でイエス・キリストを信じて救われた者たちがいたのです。でも、彼らはいまだにこの律法から縁を切ることができなかつた。彼らはまだ一生懸命この律法を守ろうとしているのです。ただし、律法を守ることによって救われるとは信じていません。でも、律法を守らなければいけないという、かつてのしがらみはずっと背負っているのです。そして、21節「ところで、彼らが聞かされていることは、あなたは異邦人の中にいるすべてのユダヤ人に、子どもに割礼を施すな、慣習に従って歩むな、と言って、モーセにそむくように教えているということなのです。」、つまり、信仰をもったユダヤ人たちが、彼ら以外のところからパウロに関してある評判を聞いていたのです。その評判とは、ある者たちが、律法は全く無視していい、モーセの教え、律法に背いてもいいということをおたかもパウロが教えているというように教えていたことです。つまり、ユダヤ教徒たちがまだ周りにいたのです。彼らはパウロは一生懸命モーセの律法に逆らうように教えている、あ

の教えは異端だと言っていたのです。だから、当然、人々の中に混乱が生じていたのです。だから、パウロは実際の宣教旅行の中で、このような人々の反対を体験して来ました。このような反対は後を絶ちませんでした。

2) パウロの反論

ところがおもしろいことは、どんな反対があってもどんな圧力があっても、パウロは福音のメッセージを変えていません。たとえ、いのちを奪われるような目に遭ったとしても、パウロは語るべきメッセージを語り続けています。すごいと思いませんか？確かに、パウロ自身が言っているようにそれはいのちがけでした。覚えていますか？使徒の働き20：24で「けれども、私が自分の走るべき行程を走り尽くし、主イエスから受けた、神の恵みの福音をあかしする任務を果たし終えることができるなら、私のいのちは少しも惜しいとは思いません。」と言っています。「私はいのちがけでやっている」と言うのです。私はいのちがけでこの神からいただいたメッセージを語り続けている、それが私の務めだと言っているのです。だから、どんな迫害があろうと、私は神が私に託してくださったこの人類が救われる唯一のメッセージを正しく、分かり易く語り続けて行くと、それがパウロの証であり、そして、その証どおりにパウロは生きていたのです。

しかし、先の話に戻ると、たくさんの人々がそのような間違っただけの教えによって混乱するのです。特に、クリスチャンたちが混乱しています。信仰が弱い者たちは、そのような様々な教えに惑わされて来ました。だから、聖書に立たなければいけないのです。今もそうですが、かつてのキリスト教会にはいろいろな「はやり」、流行があります。いろいろな新しい教えが出て来ます。弱い人々はすぐそのようなものに惑わされてしまう、そういうものに飛びついてしまうのです。大切なことは、変わる事のない神のおことばに立ち続けて行くことです。これを語るようにと神が私たちに託されたこのメッセージに、私たち信仰者はしっかりと立ち続けて行くことです。ですから、パウロのこの変わる事のないメッセージこそがまさに真実であり、このメッセージこそが神から託されたことを証明するものである、そのことに私たちは確信をもつことができます。

6章に戻って、パウロはこのような様々な教えの中で、先にも触れたように、それらに惑わされる人々がいるという現実も心得ていました。また、クリスチャンたちの中にもそれらに惑わされてしまって、パウロの語っているメッセージに対して「それは違う、パウロ、それはおかしい」と反対する人々がいることを十分に彼は承知しています。そこで彼がしたことは、その人々の反論を想定して、それに正しくみことばをもって答えることによって、人々の混乱を払拭することです。弱い信仰者たちがしっかりと「ああそうだ、聖書はこのように教えている」、これが真実だ、これが神の教えだという確信をもって、そのような混乱から抜け出すように、彼らの信仰がますます強固なものになって行くように、そのことを望んでパウロはここから教えを始めて行くのです。パウロは人々の反論を想定して、それに答えることによって、人々に確信をもたせようとするのです。

2. 人々の反論とパウロの答え

1) 人々の反論

人々がどのような反対をしていたのでしょうか？1節にあるパウロが出した最初の質問は私たちにそのことを悟らせてくれます。「**恵みが増し加わるために、私たちは罪の中にとどまるべきでしょうか。**」と、なぜ、パウロはこのような質問をしたのでしょうか？それは彼らが「パウロの語っている恵みによる救いというメッセージは、人々に罪を犯すことを奨励することになる」と言って反対していたからです。これから説明して行きますが、少なくとも、私たちはこうしてみことばを見る限り、どのような反論が為されていたのか、どのような反論があることをパウロ自身が知っていたのか、そのことを私たちは教えられます。この1節を見て私たちが察することができるのは、ある人たちはパウロが恵みによる救いを語り続けて行くなら「罪が赦されるのだから何をしても構わないのではないか」、「好きなように生きて楽しめばいいのではないか」とそのように考える人々がたくさん出て来ると言ったことです。このことはもう一度説明します。

恵みによって救われるということがどれ程すばらしい祝福なのか、そのことを理解していない人々は、悲しいことに、このような結論に至ってしまうのです。だから、皆さん思い出してください、これまでパウロは私たちにはっきりと、私たちの力、努力で救いを得ることは不可能だということを語り続けて来ました。そのようなことはあり得ないと。でも、私たちは恵みによって救われたと、そのことを語ったのです。この「恵みによる救い」という大切な救いの教理を正しく理解するなら、私たちは「好きに生きてもいいのではないか、もう赦されたのだし、赦されるのだから」という非聖書的な生き方をしようという結論には到底行き着くことなどないはずで

もう一度、1節に戻ってこの質問を見てみましょう。当然、前からの話が関連しているということは、もう皆さんよくご存じです。この5章に入ってパウロはアダムとイエスを比較しました。アダムが全人

類にもたらしたものと、イエスが信じるすべての人にもたらしたものを比較して来ました。アダムは全人類に罪をもたらした死をもたらしたが、イエス・キリストは信じるすべての人に救い、永遠のいのちをもたらした。そのように対比することによって、主イエス・キリストのすばらしさ、その恵みのすばらしさを彼は語り続けて来たのです。5：20にはこのように記されていました。「**律法がはいって来たのは、違反が増し加わるためです。しかし、罪の増し加わるころには、恵みも満ちあふれました。**」と。すでに私たちが学んで来たように、主なる神は、たとえ、どのような罪を犯してしようと、主に赦しを求めるなら赦される、主の前に赦しを求めて行くなれば、あらゆる罪は赦されるのです。だから、どんなに大きな罪でも神の恵みはそれに勝るものだと言うのです。

余談になりますが、この主なる神の赦しに関して気をつけなければいけないことがあります。それは私たちが勝手に赦される罪と赦されない罪を決めてしまうことです。そういうことで悩んでいるクリスチャンがたくさんいます。この罪は赦されるだろう、けれども、あの罪はだめだとか、私の犯したこの罪は神は決して赦すことはないとか、これぐらいの罪なら赦されるだろうが、こんなに大きな罪は赦されることはない。これは自分自身をさばき主の場に置いているのです。これは赦される、これは赦されないと自分が判断するのです。みことばが教えていることは、主はどんな罪でも赦してくださるということです。そして、あなたのすべての罪はこの方によって赦されたのです。では、赦されない罪がないのでしょうか？あります。それは、このすばらしい救い主を信じないという罪です。救いを備えてくださった神のこの救いを受け入れようとしないなら、私たちはどのようにして救われるのでしょうか？主はどのような罪であっても間違いなく赦してくださるのです。

さて、もう一度1節を見てください。パウロはおもしろいことを言っています。「**私たちは罪の中にとどまるべきでしょうか。**」と。この「**とどまる**」ということばがIコリント16：7-8でこのように使われています。「**私は、いま旅の途中に、あなたがたの顔を見たいと思っていますではありません。主がお許しになるなら、あなたがたのところにはしばらく滞在したいと願っています。**」と、ここはコリントの町のことで、8節でも「**しかし、五旬節まではエペソに滞在するつもりです。**」とあり、「**滞在**」ということばがそれに当たります。ですから、1節の「**とどまる**」というのは「**滞在する**」という意味です。そこに居続けるということです。ですから、先にも話したように、ある人々はそれほどに罪の赦しが主なる神の恵みの偉大さを証しするのなら、主が罪を赦すことによって神がすばらしい方だということが明らかになるのなら、私たちはもっともっと罪の中にとどまり続ける、そこにずっと居続けるべきではないかと言うのです。言い方を変えるなら、罪を犯し続けてもそれを赦し続けてくださる神のすばらしさが明らかにされて、神の栄光が現わされて行くのだから、私たちは罪の中にとどまり続けて罪を犯し続けて行けばいいと、これが彼らの主張だったのです。このような反論があったのです。恵みによって救われるのなら、ただ信じて救われるのなら、罪を赦し救ってくださった神のすばらしさが証されるために、私たちは益々罪を犯して行けばいいと。「**罪の中にとどまるべきでしょうか。**」、継続して罪の中に住み続けて行く、継続して罪を犯し続けて行く、そのような考え方が存在していたことをパウロは知っていたのです。

皆さんはこのような話を聞いて「そんなことはあり得ない」と思われるなら健全です。でも実は、そうでない人々も実際にいるのです。ユダが4節のところでこのように言っています。「**というのは、ある人々が、ひそかに忍び込んで来たからです。彼らは、このようなさばきに会うと昔から前もってしるされている人々で、不敬虔な者であり、私たちの神の恵みを放縦に変えて、私たちの唯一の支配者であり主であるイエス・キリストを否定する人たちです。**」、ある人々が教会に入り込んで来て間違った教えを持ち込むと言うのです。どのような人々でしょうか？「**不敬虔な者であり**」、彼らは「**神の恵みを放縦に変える**」、「**主であるイエス・キリストを否定する人たち**」だと言います。神は赦してくれるのだから自分の好きに生きていいではないかと、そのような教えを持ち込む人々が出て来ると、そのことを言っているのです。実際にそういう人物が存在しています。ラスプーチンという人物です。彼はロシア王家のロマノフ家で、特に、ロシア最後の皇帝であったニコラスII世に非常に影響を及ぼした人物だと言われています。彼は修道士だったのですが、ある期間、この皇帝に大きな影響をもたらしています。彼はこのようなメッセージを語ったのです。「人がより多くの罪を犯せば多くの恵みをいただくことになる。そこであなたがより多くの罪を思いっきり犯すなら、あなたは神にご自身の栄光を現わすより多くの機会を与えることになるのだ」と。今、私たちが見て来たことを実際に教えたのです。しかも彼はこう言います。「もし、あなたがただの普通の罪人ならば、あなたは神にご自身の栄光を現わす機会を与えていない。だから、あなたは並外れた、驚くべき罪人にならなければいけない。」と。実際にこのようなことを教えた人物が存在しているのです。19世紀の終わりから20世紀にかけてロシア革命前の時代です。

私たちが罪を犯せば犯すほどそれを赦してくださる神のすばらしさが証されるのだから、どのように生きても構わない、私たちが罪を犯すことは実は神のためであり、神の栄光が現わされるために私たちは益々罪を犯そうと、そのような考え方をする人たち、また、そのような考え方に影響を受けたクリス

チャンたちがいたことをパウロは知っているのです。どの時代にも、律法など関係ない、どのように生きても構わないということを信じ、教えている人々は存在しているのです。

2) パウロの答え

(1) 絶対にそんなことはない——私たちは新しく生まれ変わった者だから

パウロはそのことを想定して言います。2節に「絶対にそんなことはありません。」と。ここからパウロはこういう考え方に対する反論を述べています。この考えに彼は真っ向から反対しています。「絶対にそんなことはありません」と。もちろん、これは3：4ですで見えて来ました。2節からその反対の理由を彼は述べて行きます。彼が言いたいことは、イエス・キリストを信じている私たちは、なぜ、そのような生き方ができないのか、それは「新しく生まれ変わった者だから」だということです。だから、私たちはかつての生き方をすることができないと、そのことをパウロは教えようとするのですが、まず、彼は最初に、クリスチャンとはどういう人か、そのことを教えているのです。クリスチャンの定義です。

◎クリスチャンとはどういう人か？

a) 罪に対して死んだ者

イエスを信じて救われた人とはこういう人だということを教えるのです。簡単に言えば、それは「死んだ人でありよみがえった人」です。つまり、新しく生まれ変わった人だと言うのです。パウロがこの2節で言うことは、クリスチャンとは「罪に対して死んだ者」だということです。「罪に対して死んだ私たちが、どうして、なおもその中に生きていられるでしょう。」。エペソ人への手紙2：1でパウロは私たちが救われる前の様子を教えています。「あなたがたは自分の罪過と罪との中に死んでいた者であって、」とあります。これを覚えておいてください。「罪の中に死んでいた者」、つまり、救われる前の私たちは「罪の中に死んでいた」のです。ところが、ローマ6：2を見ると「罪の中に死んでいる」のではなく「罪に対して死んでいる」と書かれています。エペソ2：1の「罪の中に死んでいた」というのは、救われていない、生まれながらの罪人の状態を表わしています。すべての人は生まれながらに罪の中に死んでいるのです。その中にどっぷりと浸かっているのです。ところが、ローマ6：2でパウロが言っていることは、救われた私たちは「罪に対して死んだ者だ」ということです。

パウロはいったい何を言わんとしているのでしょうか？実は、この2節のみことばを直訳すると、敢えて、ここに入っている関係代名詞を分かり易く訳すと「罪に死んだところの私たち」となります。ここで使われている関係代名詞は「特性」、「特質」を表わす関係代名詞です。特に、ギリシャ語の辞典を見ると「典型的な特徴を強調するために用いられる」とあります。つまり、2節でパウロが言っていることは、クリスチャンがもつ典型的な特徴を表わしたのです。クリスチャンとはこういう人だということ、「罪に対して死んだ者」がクリスチャンの特徴だと言うのです。ですから、救いとは、このことばを使えば「罪の中に死んでいた者」が「罪に対して死んだ者」となるということです。ここで言われていることをもう少し分かり易く見て行くと、パウロが言いたかったことは、救われた者たちは罪との関係において変化が生じるということです。ここでパウロが「罪に対して死んだ」と言うのは、罪の中にいるというその状況を指しているのではなく、行動を指しているのです。思い出してください、私たちがイエス・キリストの福音を聞いた時に、私たちは選択をしました。私たちはこの救いを人間の観点から見ているわけです。人間のサイドから見ているのです。イエス・キリストの福音を聞いた時に、私たちはこの福音のメッセージを受け入れるか、この主を受け入れるかどうかという選択をしました。罪人である私たちがこの救い主に対してどうするのかという選択をするのです。明らかに、救いとは選択でした。だから、マルコの福音書の8：34でイエスが救いに関してこのような招きをされています。「それから、イエスは群衆を弟子たちといっしょに呼び寄せて、彼らに言われた。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。」と。これはイエスを信じたあとクリスチャンとしてどのように生きるのかということではありません。これは救いへの招きなのです。ここで言われている「自分を捨て」、「捨てる」とは「拒絶する」ということです。何かとの縁を切る、それとの関係を断つということです。つまり、イエスがここで言われたことは、これまでは自分中心であり、自分勝手であり、そして、創造主なる神を全く無視して好き勝手に生きて来た、そのような生き方に対する訣別なのです。「自分を捨て、自分の十字架を負い、」と言われたのは、イエス・キリストを信じて従って行くことは大変なことだからです。そのような決心があるかということです。イエス・キリストのために喜んで苦しみを受けようとする、その覚悟があるかということです。なぜなら、信仰には苦しみがつきものだからです。

だから、イエス・キリストの招きは、もし、あなたがわたしを信じようとするなら、あなたはこれまでの自己中心で神を全く無視した罪の生き方と訣別して、そして、何があっても私はあなたを信じてあなたに従って行きますという、その決心ができるかと言われたのです。あなたは必要であれば喜んですべてのものをわたしのためにささげることができるかと言われたのです。だから、イエス・キリスト

を信じた者たちは、このような決心をしてイエス・キリストを私の神、私の主人と信じて従って行くという選択をした者たちなのです。ですから、ローマ6：2で「**罪に対して死ぬ**」ということも同じです。私たちの選択、私たちの決心です。私はこの罪と縁を切るということです。ですから、ローマ5：21に「**それは、罪が死によって支配したように、…**」とあるように、かつての私たちは罪によって支配されていたのです。でも、私たちはイエス・キリストによって救われることにより、罪の支配から解放されて、今度は恵みによって支配される者になったのです。6：7を見てください。「**死んでしまった者は、罪から解放されているのです。**」とあります。この6章の中ではそのことが何度も繰り返されています。つまり、イエスを信じた私たちはかつて私たちを支配していた罪から解放されたのです。だから、私たちはかつて私たちを支配していた罪に対して、もう、私はあなたと縁を切ると言うのです。そのよう決心をしてイエス・キリストを信じ、そして、私たちの日々の生活においてもこの罪との戦いの中であって、その罪から離れようとするのです。

これは救われる前の生き方とは違う生き方です。かつて、イエスを信じる前の私たちの生き方は罪の奴隷であり、罪の支配のもとであって、罪のままに生きて来たのです。しかし、私たちはそこから解放されて、生まれ変わった者として、この罪に対して私はあなたとは無縁だ、あなたに従いたくない、神が喜ばれることを選択して行くとするのです。だから、2節に「**どうして、なおもその中に生きていられるでしょう。**」とあります。「**なおもその中に**」とは「依然として、今もなお、継続して」という意味の副詞です。「生きて行くことができるでしょうか」、その中で暮らし続けること、生活し続けること、その罪の中にどっぷりと浸かって生活する、かつてのような生き方がどうしてできるのかということです。つまり、パウロが言いたいことは、イエスによって救われた者たちはかつて生きていたような生き方はできないということです。聖書翻訳者のJ・B・フィリップスは、この2節の後半部分をこのように訳しています。「私たち、すなわち、罪に対してすでに死んだ者たちが、少しの間でも罪の中を生きることがどうしてできるのだろうか。」と。パウロはそのように言っているのです。もう、そこから出て来たのだから、なぜ、なおもそこにとどまり続けたいという思いをもつことなどあるのでしょうかと。

「**罪に対して死んだ**」ということは、決して罪の誘惑を受けなくなったとか、罪を犯すことがなくなったということではありません。ですから、この6：11-14を見て行くと、パウロはそこでどのように生きて行くのかということをお話しています。罪との葛藤、罪との戦いです。それでいながらパウロが教えたかったことは、これまでイエス・キリストを信じる前と同じように、主なる神に逆らい主を悲しませ主の怒りを買うような生き方を、平気で継続することはできなくなったということです。だから、生まれ変わったのです。だから、救われたのです。ですから、パウロが言っていることは、「罪を犯すことからの解放」ではなくて、「罪の力からの解放」です。6：22に「**しかし今は、罪から解放されて神の奴隷となり、聖潔に至る実を得たのです。その行き着く所は永遠のいのちです。**」とある通り、罪から解放されたのです。支配していた罪の力から私たちは解放されたのです。ですから、クリスチャンは神の助けによって神の恵みによって罪に打ち勝つことができるのです。

Iヨハネ3：9を開いてください。「**だれでも神から生まれた者は、罪のうちは歩みません。なぜなら、神の種がその人のうちにとどまっているからです。その人は神から生まれたので、罪のうちは歩むことができないのです。**」と書かれています。ヨハネは、神から生まれた者、つまり、救われた者は「**罪のうちは歩みません**」と言っています。この「**罪のうちは歩む**」は現在形です。継続して、習慣的に歩み続けるということです。そういうことができなくなった、なぜなら、「**神の種がその人のうちにとどまっているから**」、その人は生まれ変わったから、その人のうちには神のいのちがあるからと言うのです。それがここで言われている「**神の種**」です。私たちイエス・キリストを信じた者には主ご自身が内在しておられます。主のいのちが与えられた、つまり、私たちは生まれ変わったのです。だから、これまでと同じような生き方はできないのです。それが証拠に3：4を見ると「**罪を犯している者はみな、不法を行なっているのです。…**」とあり、この「**罪を犯している**」とは継続であり、同じように現在形です。6節には「**だれでもキリストのうちにとどまる者は、罪のうちは歩みません。**」と、この「**とどまる**」、「**罪のうちは歩みません**」も現在形です。そして、今見た9節「**罪のうちは歩みません**」、「**罪のうちは歩むことができない**」、これらすべては現在形です。つまり、パウロが言っていることは、今までと同じ生き方はできない、生き方が変わるということです。

でも、誤解をしないために言いますが、本当のクリスチャンは罪を犯すのでしょうか？答えは「イエス」です。本当のクリスチャンも罪を犯します。では、本当のクリスチャンは罪と分かっているながら罪を犯すことがあるのでしょうか？これも「イエス」です。間違っていると分かっているながら、悲しいことに、その誘惑に負けて罪を犯すことがあるのです。でも、救われていない人との違いは何かと言うと、救われている人は罪を犯した後、心からそれを悔い改めて、主の前に正しくありたいと願って行動するのです。でも、罪を犯しているながら悔い改める思いもない、悔い改めようともしない、その必要も感じない、良心の呵責を少し感じたとしても、神の前にその罪を告白しようという思いは出て来ない、これ

は問題です。先ほども話したように、神から生まれた者は罪のうちに継続して歩み続けることはできない、なぜなら、神の種、神のいのちがその人のうちに内在しているからです。

パウロはある一つの質問を想定しました。彼が経験から何度も聞かされたことでした。恵みに対しての全く根本的に誤った解釈、誤った教えでした。人々は、神が罪を赦してくれて、そして、その赦しを通して栄光を現わされるのなら罪を犯そうと言いました。パウロは「とんでもない！」と反論しました。生まれ変わったあなたがなぜ、これまでと同じ生き方を継続することができるのか、もし、あなたが本当に救われていて、あなたのうちに神のいのちが宿っているなら、あなたは間違いなく、これまでと同じような生き方はできないと言います。そして、それをもって私たちは、その人は本当に神によって救われていることを見るのです。イエス・キリストを信じて救われた者たちは、この罪との関係を神によって変えられた者たちです。罪の中から解放され、そして、罪に縁を切って罪から離れようとします。悲しいけれど、罪を犯すことが多々ある私たちたちです。しかし、これまでと同じようには生きないのです。

最後に、パウロはガラテヤ人への手紙 2：20 でこのように言います。「**私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。**」と。もう、私が生きているのではない、キリストが私のうちに生きています。クリスチャンは生まれ変わったのです。生まれ変わったゆえに、これまでの罪を愛し罪の中を生きる生き方ができなくなったのです。こんなにすばらしい救いを主が与えてくださった、そのことをパウロは教えながら、信仰者の皆さん、だから、あなたは救われた者にふさわしい生き方をもって主の栄光を現わしなさいと言うのです。そのことはこの6章を通して彼が繰り返し教えてくれます。いい加減な生き方をするな、どのように生きてもいいのではないと言うのです。罪に対して心を開いたり心を許すな、神の栄光を汚すようなものから離れなさい、神を悲しませるような罪から離れなさいと。そして、救ってくださった神の栄光を現わすために、そのためだけに生きなさいと、そのことをパウロは私たちに勧めてくれます。

問題はあなたがそういう生き方をして行こうと選択し続けるかどうかです。どうぞ、主の恵みにふさわしい者として歩んでください。どのように生きてもいいのではない、また、そのように生きることができなくなった、自分の好きなように生きることができなくなった、それが神によって救われた者たちだと、そのことを教えてくれるのです。